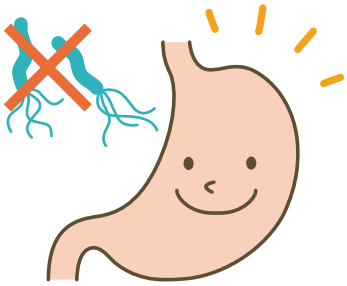
胃がん予防対策 ピロリ菌を棲まわせない

大腸がんに次ぎ罹患率が高い「胃がん」。世界保健機関（WHO）では、胃がんの8割はピロリ菌の感染が原因で、ピロリ菌除菌により胃がんの発症リスクを3～4割減少できると報告しています。

県では、胃がんの予防対策として、ピロリ菌感染検査を勧めるとともに、除菌治療費の一部を助成しています。ピロリ菌について正しく理解し、自分の胃の健康度を調べましょう。



「ピロリ菌」知っていますか?

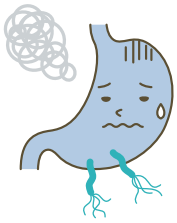
■ピロリ菌の正体

主に胃の中に棲（す）む細菌。大きさは0.004ミリメートル程度。正式名称は「ヘリコバクター・ピロリ」。一般的な菌は、胃が食物を消化するために分泌している強い酸性の胃液（胃酸）の中では生きられませんが、ピロリ菌は、自分の周りだけ胃酸を中和することで生き延びます。

■幼少期に感染

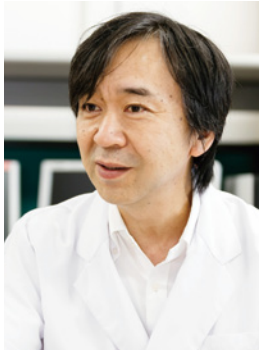
胃の免疫力がまだ強くない幼少期に、食物をかみ砕いて与えたり、同じスプーンなどを使うことにより、感染する確率が高いといわれています。ピロリ菌は、一度感染すると除菌しない限り、生涯にわたって胃の中に棲み続けます。

■ピロリ菌感染者は、胃がんのリスクが5倍



ピロリ菌は、胃の内壁に炎症を起こし胃を守っている粘液を減少させます。そのため胃が胃酸の影響を受けやすくなり、胃炎や消化性潰瘍を発症します。また、胃がんのリスクが5倍になるともいわれています。

2 感染検査を受け、早期に除菌を



山梨大学医学部
第一内科准教授
佐藤　公さん

胃の中に棲みつき病気を引き起こす原因となるピロリ菌

ピロリ菌は胃の中に棲み着き、病気を引き起こす原因になります。基本的に大人になってからの感染は無く、まだ胃酸をつくることができない、幼少期にピロリ菌を含んだ物を口にすることで感染します。近年は上下水道などの衛生環境が整い、若い世代の感染率は下がっていますが、40歳以上の感染率は6割くらいになります。

お父さん、お母さんになる前の若い時期にピロリ菌チェックを

幼少期にピロリ菌に感染していても自覚症状はほとんど出ませんが、大人になってから慢性の胃炎、萎縮性胃炎を引き起こし、その過程で胃潰瘍や十二指腸潰瘍となる要因になります。またピロリ菌に感染している人は、胃がんやリンパ腫などの悪性腫瘍になる率が高いことが分かっています。ピロリ菌に感染してすぐ胃がんになるわけではありませんが早い段階で感染検査を受けることが大切です。検査は内視鏡を使う方法や、血液、便などを使って調べる方法があります。人間ドックの際にオプションで申し込むこともできますので、感染率の高い年齢層はもちろん、若い世代の方にも積極的に検査を受けていただきたいです。

除菌後も、定期的に内視鏡検査を受けましょう

ピロリ菌の除菌治療は、3種類の薬を1週間飲むだけです。これで80～90パーセントくらいの方が、ピロリ菌の除菌に成功します。一回目の除菌に失敗した場合は、別の薬に変えることで、95パーセントくらいの除菌が可能です。

除菌後、直ちに胃がんにならなくなるわけではなく、除菌時、すでに胃がんが潜んでいることもあります。胃がんは早期に見つかれば治る病気ですから、定期的な内視鏡検査を勧めています。

2 除菌治療費の一部を助成します

健康増進課
岩佐 景一郎 課長

胃がんの原因の8割は、ピロリ菌といわれています。日本人には胃がんが多く、がんによる死亡原因の第2位です。

県では今年度、医療保険適用のピロリ菌の除菌治療をされた方に対して、治療費の一部を助成する制度を都道府県として初めて実施しています。除菌治療の普及によって、将来的に胃がんで亡くなる方を減らしていくこと、それと同時に県民の皆さんに胃がん予防への意識を高めてもらいたいです。

平成28年4月1日以降にピロリ菌除菌治療を開始した方から、助成金の申請ができます。ぜひ、これを機会に検査を受け、除菌治療をし、胃がんを予防をしていただきたいと思います。

ピロリ菌感染検査
「尿素呼気試験」

ピロリ菌の除菌治療費助成

■助成対象となる治療

ピロリ菌の感染者が行う医療保険の適用を受ける除菌薬による除菌と、除菌後の判定検査を実施するまでの一連の治療

■助成対象者

・申請時に県内に住所を有している方
・除菌治療開始日の年齢が20歳以上75歳未満の方

■助成金額

除菌治療に要した薬剤費及び除菌後の判定検査費の一部
（各1,000円を限度）

■受付窓口

健康増進課がん対策推進担当

詳しくは　やまなし　ピロリ　検索

【問い合わせ先】健康増進課　TEL 055-223-1497　FAX 055-223-1499